『マルクス主義者よ、聞け！』についての議論

《ロバート・B・カーソンは、一九七〇年四月号の『マンスリィ・リヴィウ』の論文で、『マルクス主義者よ、聞け！』の「主要な突き（スラスト）（＝鋭い攻撃的批評）」は「社会と革命運動の階級に基づいた分析を破壊する」ことである、と書いている。この批判は『マルクス主義者よ、聞け！』を読んだ多くのマルクス主義者達によってなされてきた。(注)》

（注）これは『マルクス主義者よ、聞け！』についての幾らかの議論の編集された要約である。そして、議論のほとんどはアルタネイト・U、つまりニューヨークの解放学校の私のアナルコ＝コミュニズム（無政府共産主義）クラスでおこなわれた。私はパンフレットの読者によって取りあげられたもっとも代表的な、そして、繰り返し発せられた質問だけを選んだ。

カーソンの批難は全くばかばかしい。私は、彼が私の論文にざっと目を通す以上のことをしたかどうか深く疑う。カーソンは、私のアプローチが「非歴史的」であり、私が「未熟な種類の個人主義的アナキズム」を促進しようとしている—これは、私の論文の大部分が過去の革命から重要な歴史的教訓を引き出そうと試みている、という事実にもかかわらず、また私の論文は明らかにアナルコ＝コミュニズムにコミットしている、という事実にもかかわらずである—と言い続ける。

カーソンの批判についてもっとも興味あることは、多くのマルクス主義者の理論的レベルについて、それが暴露するところのものである。明らかにカーソンは未来主義的アプローチを「非歴史的」と看なしている。彼はまた、自由は各個人が自身の日常生活を支配する時にのみ存在する、という私の信念を「未熟な種類の個人主義的アナキズム」と看なしているように思える。ここで我々は問題の核心に到着する。未来主義と個人的自由は、実際、パンフレットの「主な突き」である。カーソンの応酬は、パンフレットが今日のマルクス

主義について確かめようと設定したところのことを、つまりマルクス主義（私はここではマルクスについて言っているのではない）が未来主義的でない、ということ及びマルクス主義の見通しは具体的な、実存的な自由に向ってではなく、抽象的な自由—人々のためよりはむしろ「社会」、「プロレタリアート」、諸カテゴリー等のための自由—に向って方位されている、ということを正確に証している。カーソンの最初の批難は私のみならず、マルクス—『ルイ・ナポレオンのブリューメル十八日』におけるマルクスの未来主義—に向けられるべきである、と私は強調できる。

私が「社会と革命運動の階級に基づいた分析」に反対している、という批難に関して、私は、「階級分析」がパンフレットに充満している、とでも言う必要があるのか。私が「階級に基づいた分析」で仕事をすることなしに「資本家（キャピタリスト）」とか「ブルジョア」のような用語を用い得た、ということを認め得るか。もともと私は、その事に関してはいかなる疑いもあり得ない、と考えていた。それ故、私は「階級分析（クラス・アナライシス）」という表現をテクストでは「階級ライン」に変更してしまった、そして、多分、私は、この変更が伝えようと意図する相異を説明したほうがよかっただろう。

カーソンが実際に言っていることは、私がマルクス主義の「階級分析」—産業プロレタリアートがその分析では、貧窮と悲惨化によって革命に駆り立てられるところの「階級分析」—を持っていない、ということである。カーソンは、マルクスの伝統的な「階級ライン」が階級闘争について言うべきことがあるならば、そのすべてを研究し尽している、と明らかに仮定している。しかも、この点において、彼はあまりにも多く仮定し過ぎている。人は、例えば、マルクスの階級分析とは全く異なった—しかも、今日より適切である—別の階級分析を見出すために、バクーニンに帰える必要がある。バクーニンは、産業プロレタリアートが決して社会のもっとも革命的な階級を構成するものではない、と信じていた。バクーニンは、資本主義産業の発展に伴なって起きる産業労働者階級のブルジョア化の予言が彼に負っている、という是認を決して受けなかった。バクーニンの考えでは、もっとも革命的な階級は産業プロレタリアート—「資本主義生産それ自体のまさに機構（メカニズム）によって常に数が増大し、規律を与えられ、統一され、組織される階級」（マルクス）—ではなく、土地から追いたてられた貧農や都市の落伍者、つまりマルクスがあれほど熱心に軽蔑した農村や都市のルンペン部分である。我々は、バクーニンがマルクスと比較していかに鋭く正確であるかを見出すためには、アメリカの都心部—アジアの水田地帯については言わずとも—以上に欲張る必要はない。

その事が判明したとき、資本主義産業の発展は労働者階級を「訓練し」、「統一し」、「組織した」のみならず、まさにこれらの処置によって、プロレタリアートを幾世代もの間に変質した。対照的に、今日の社会の過渡的な、ルンペン化された階級（黒人、ドロップアウトした青年、工場システムに根底を有しない学生や知識人や芸術家のような人々、彼等の労働倫理への忠誠が文化的要因によって動揺させられてきた青年労働者達）は、今日の世界におけるもっともラジカルな構成部分である。

「階級分析」は必ずしもマルクスの十九世紀の翻案で終始するものではない。しかも、その翻案は恐ろしく不正確なように私は思う。さらに、階級闘争は生産点で終始するものではない。それは、彼等

の多くが一日分の仕事を工場で決して行ったことがないところの失業者や（身体的、精神的不適当のため）雇用され得ない人々等の貧困から生じるかも知れない。それはゆっくりと社会に浸透する可能性の新しい感覚—あらゆる伝統的階級に事実上しみ込むところの「在るもの」と「在り得るもの」との間の緊張—から生じるかも知れない。それは、資本主義の社会的安定がそれに基づいているところの伝統的階級構造の文化的、物理的分解から生じるかも知れない。最後に、あらゆる階級闘争は必ずしも革命的ではない。古代ローマの最下層民（プロレタリアス）と貴族（パトリシアス）との間の階級闘争は決定的に反動的であり、マルクスが『共産党宣言』の諸行で述べているように、事実上「闘争する両階級の共倒れ」に終った。

今日、貧困のみならず、かなりの程度の富裕でさえも革命的不安動揺を起す原因となりつつある—これはマルクスが決して予期しなかった要因である。都市の落伍者をプロレタリア化することによって出発した資本主義は、仕事、工場規律、あるいは労働倫理等をもはや深刻には受け取らないところの「働きのない」青年産業労働者も含めて、新しい都市の落伍者をつくり出すことによって、今やその生活環を終えつつある。落伍者のこの階層は新しい経済的な基礎—貧窮—後の工業技術、オートメーション、相当な程度の物質的豊富さ等—の上に成立している、そして、それは、マルクス主義者があれほど専心に人間の未来としてヴィジョン化する無階級社会を啓発的に予示している。この顕著な弁証法、この「否定の否定」は、マルクス主義運動の重苦しい退屈な思想家達の消えなんと明滅する理解力をかき立てるだろう、と誰もが考える。

《産業プロレタリアートの支持なくして、工業的に発展したいかなる資本主義国においても、革命を考えることは困難であるだろう》

勿論。しかも、『マルクス主義者よ、聞け！』は、社会革命が産業プロレタリアートの参加なくして可能である、といういかなる主張もしていない。事実、私の論文は、プロレタリアートが生活と労働の質に関する諸問題を力説することによって、いかにして革命運動の側に獲得され得るか、を示そうと試みている。勿論、私は、「生産の労働者管理」のスローガンを挙げるリバータリアンなマルクス主義者やアナルコ＝サンジカリストに賛成する。しかしながら、私は、このスローガンが今や十分に役立つかどうか疑わしく思う。私は、労働者が革命的行動に立ち上った時、労働者は工場の支配以上のことさえも要求するだろう、と思う。私は、労働者が労苦の消滅、あるいは、結局同じ事になるが、労働からの自由を要求するだろう、と思う。確かに、ドロップアウト的見解は、労働者階級の家庭の子供達—青年の文化によって影響されているハイ・スクールの子供達—の間に成長しつつある。

他の多くの要因が情況に関与するかも知れないが、労働者は、彼等が伝統的労働者階級の諸特徴を脱ぎ捨てる程度にまでは、革命的見解を発展させるだろう、ということは真実として残る。青年労働者は増々レジャーと疎外された労働の廃棄を要求するだろう、と私は思う。青年マルクスはプロレタリアートにおける非因襲的な価値の発展に無関心ではなかった、と私はつけ加えてもよい。『聖家族』において、マルクスは、彼女の愛と誠実を自発的に示し、結婚とブルジョア的因襲を軽蔑するところのオイゲン・スウの『さまよえる

ユダヤ人』におけるパリの労働者階級の一少女を、明らかに好意を持って引用している。彼は述べている。「彼女は偽善的な、心の狭い、利己的なブルジョアの妻に対する、ブルジョアジーの全社会（サークル）に対する、つまり公的社会に対する真に人間的な対照を形づくっている。」青年マルクスの見解では、労働者階級は、全的な疎外、屈辱、非人間化等で苦悩している、ということのみならず、その階級が生活の力と人間的価値を確定する、ということにおいて資本主義の否定である。不幸にも、この種の観察は、マルクスの社会主義が益々「客観主義的」に、「科学的」になるに従って（マルクスの有名な—しかし、翻訳されていない、少ししか読まれていない—『グリュントリッセ』の称賛者達にもかかわらず）、薄らいで行く傾向にある。後期のマルクスは革命的階級に必要不可欠な諸性格として労働者のブルジョア的特徴—労働者の「規律」、「実際性」、そして「リアリズム」等—を重んじ始める。

マルクスが『聖家族』において取ったアプローチは正しいものであった、と私は思う。労働者階級が、階級として、階級社会の一掃打破を当然意味している、という概念につまづいて、マルクスは、この階級がブルジョアジーの他我（＝分身）である、ということを理解するのに失敗した。唯新しい文化的運動のみがプロレタリアートの見解を改造することができる—それを非プロレタリア化することができる。皮肉にも、マルクスの青年時代のパリの労働者階級の少女達は産業労働者ではなく、むしろ小規模生産と大規模生産にまたがるところの過渡的階級の人々であった。彼等は大部分ルンペン化した社会の構成部分、つまりフランス大革命のサン＝キュロットのような部分であった。

《もし『マルクス主義者よ、聞け！』における分析が、「階級に基づいて」いるならば、階級闘争の性質とは何か。》

階級闘争は物質的搾取の周囲にのみ集中するのではなく、精神的搾取の周囲にもまた集中する。加えて、全く新しい諸問題が生じている—威圧的態度、労働の質、生態（あるいは、より一般的言語で表現すれば、心理的、環境的抑圧）等である。さらに、疎外された、抑圧された社会の構成部分は、生産手段に関係していることによって限定される単一の階級ではなく、今や人民の多数派である。より解放的な感覚は勿論、よりラジカルな感覚は、「円熟した」人々の中ではなく、青年のグループに出現している。「階級」や「階級闘争」のような用語は、ほとんど完全に経済的カテゴリーや関係として考えられているので、あまり一面的すぎて闘争の普遍化を表現することはできない。もしあなたが好むならば、これらの制限された表現を用いよ（その目標はなおも一つの支配階級、一つの階級社会である）、しかし、この用語は、用語の持つ伝統的な含蓄では、大々的な、多次元的な闘争の性質を反映しない。「階級闘争」のような語は、経済闘争に伴って起きるところの文化的、精神的反乱を包含することができない。

《『マルクス主義者よ、聞け！』は貧窮—後社会について非常に多くを語っている、がしかし、現実についてはどうか。合衆国にはなおも非常に多くの貧困と空腹があるではないか。失業、劣悪な住宅、人種差別、労働のスピード・アップ、労働組合の官僚制、ファシズ

ムや帝国主義や戦争等の危険等については言うまでもなく、インフレーションが益々大きな問題となっているではないか。》

『マルクス主義者よ、聞け！』は、「新左翼」において発展しつつある社会問題の単純化（経済的「あれかこれか」及び第三世界に位置づけての「あれかこれか」の考え）を取り扱うために書かれた。パンフレットで発展させられている貧窮—後社会の観点は、一つの単純化（階級闘争）を他の単純化（ユートピア）によって取って代えることを意図されているわけではなかった。そう、これらの経済的、人種的、官僚的現実は合衆国及び国外の数限りない人々にとっては存在する。それらを精力的に、戦闘的に処理できないいかなる革命運動も、それらを単一にであれ、個別的にであれ、他のすべてを排除して処理する運動と同様に、ゆがめられるだろう。貧窮—後社会の可能性、生態、ユートピア、青年の文化、及び疎外等についての私の論文は、ラジカルな理論と実践におけるギャップを埋めることを助けようと意図されているのであって、新しいギャップをつくることを意図しているのではない。

我々が面する真に重要な問題は、現在の貧窮社会の現実がいかにして未来の貧窮—後社会のための可能性と関連づけられ—そして、それによって条件づけられ—ているか、ということである。この真に弁証法的な問題に関する限り、「左翼」の重苦しい退屈な思想家達は、信じ難い程軽率であり、狭く経験主義的であることを自己暴露している。工業化した西洋世界では、貧窮は強く主張されねばならない、それほど工業技術の潜在的生産力は大きい。今日、経済計画は一つの基本目的を持っている—高度に発展した工業技術を商品経済の枠組内に閉じ込めておくこと。一世代前から、ほとんど受動的に耐えられてきた社会問題の多くは、「在るもの」と「在り得るもの」との間の緊張が、「在るもの」が極度に不合理に思えるところの点に到達してしまったが故に、今や耐えられ得ないものとして看なされている。この緊張は、四半世紀前には、消えなんと明滅するような抗議のみを喚起したところの多くの現実に爆発的な性格をつけ加える。さらに、「在るもの」と「在り得るもの」との間の緊張は、幾世代にもわたって、ラジカルな諸運動のもとをなしてきたあらゆる経済的、社会的問題を条件づける。我々は、もし我々がこれらの諸問題を貧窮—後の経済的、社会的、文化的可能性の光の下で観るのでないならば、もはやこれらの諸問題を適切に処理することができない。

具体例を示してみる。福祉事業の保母達による彼女達の配付額の増加のための闘争がある、と仮定する。過去には、保母達はリベラリストの諸グループかスターリニスト達によって組織された。陳情書が作成され、デモが組織され、そして、多分一、二の福祉事業所が占拠された。ほとんどあいも変らず、諸グループや諸党のうちの一つが、もし選出されたなら、自分は福祉事業への増額出費のために「断固として」闘うだろう、と公約する「革新候補」を引き出して見せた。闘争全体は組織的形態と体制内に包摂された—保母達の公式的会議（糸を引く支援の「組織者達」を伴った会議）、公式的行動（官公庁への請願、デモ、住民投票等々）、そして、多分控え目加減の直接行動等々である。事態は、大部分、福祉事業問題の周囲での将来の闘争を監督する（そして、後には裏切る）ために公的組織を長くとどめておくことで終りになった。

ここでは現実が完全に可能性に打ち勝った。もっとも良くて、数少ない保母達が「ラジカル化」されたかも知れない、そして、そのことは、彼女達が政治的影響力を強めるために共産党のような組織に加入する（あるいは、そのような組織によって恥知らずにも利用される）、ということを意味した。その他の者はというと、福祉事業所の保母達のほとんどは、彼女達の日常生活のみすぼらしさに、そして、人類としての種々の程度の受動性へと帰還した。「指導者」、「政治家」、「組織者」等としてのエゴの歩みをしなかった彼女たちにとっては、何も真に変化しなかった。

（トッド・ギトリンの語句を用いると）「貧窮—後意識」を持った革命家にとっては、この種の情況は耐え難いだろう。最初にその闘争を動機づけた具体的問題を見失なわなければ、革命家は、普通の組織型が押しつける関係とは全く異った段階の関係を保母達の間に触媒しようと努めるだろう。革命家は、共同体の深い意識、つまり関与する人々のまさに主体性を一変するだろうところの円熟した多面的な人間関係を助長しようと努めるだろう。グループは、関与するすべての人々の完全な協同を達成するために、小さいであろう。個人的な関係は、単に問題に位置づけられているのではなく、親密になるだろう。人々は相互に理解したり、相互に対立したりするようになるだろう。人々は、もっとも完全な、非疎外的な関係を達成するための考えを相互に探究するだろう。保母は彼女達の福祉事業費の配付額は勿論、セックシズム、家主によって悩まされていることは勿論、子供の養育、生活費は勿論、人類としての彼女達の夢や希望等々について議論するだろう。

この親密さから、親類的関係、相互扶助、共感、連帯等の支持システムが日常生活に希望に満ちて成長してくるだろう。保母は子守留番や育児の世話等の交代システム、非常に安い価格での食料の協同購入、共同炊事と共同食事、生活技術と新しい社会理想の相互学習、創造的な才能を育てること、そして、他の多くの共有の諸経験等を確立するために共同して働くことができる。探究され、変化され得る生活のあらゆる面が、新しい種類の諸関係の一部分となるだろう。この「拡張的家族」—確実な親和と集団活動に基づいている—は、「組織者」、「委員長」、「実行委員会」、エリート、政治操縦者等によって媒介調整される諸関係と置き換るだろう。

配付額を増額する闘争は、福祉事業システムを超えて、学校、病院、警察、近隣の身体的、文化的、美術的、レクレーション的娯楽設備、商店、家庭、地域の医者や法律家、等々に—地区のまさに生態に到るまで—拡大するだろう。

私がこの問題について述べたことは、あらゆる問題—失業、劣悪な住宅事情、人種主義、労働条件—に適用され得る、そして、これらの諸問題においては、ブルジョア的機能様式の陰険な同化が「リアリズム」や「実際性」等として隠されている。福祉事業の闘争から発展し得た新しい段階の関係は、現実が貧窮—後意識によって陶冶され、条件づけられる、という意味でのみユートピアである。未来は現在に浸透する—未来は、人々が「組織する」方法を、人々がそれのために骨折り、努力する目標を鋳直す。

《多分、貧窮—後的展望は、合衆国やヨーロッパでは可能である、がしかし、工業技術の発展が人々のもっとも基本的な必要を満足することさえ恐ろしく不十分である第三世界に対して、貧窮—後的ア

ブローチはいかにして関連するか、を理解することは困難である。合衆国やヨーロッパにとっては可能であるリバータリアン革命や非威圧的な、直接無媒介の社会形態が、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ等においては、高度に中央集権化した、威圧的な制度の厳密な計画に押しのけられ、取って代られるべきである、と思われる。カール・オグレスビィは、これらの諸大陸が合衆国に追い付くのを援助するためには、必要とされる品物を生産するためにアメリカ人が一日に十ないし十二時間働くことが必要である、と論じてさえきた。》

我々は第三世界について存在するところの混乱を払いのけねばならない、と私は思う。この混乱は、一部は第三世界についての皮相な知識のせいであるが、第一世界におけるラジカルな運動に恐ろしい程の害を与えてきた。合衆国における「第三世界」イデオロギーは、アジアやラテン・アメリカにおける運動の軽率な模倣を促進することによって、第一世界における社会的諸任務の回避へと導いている。結果は、アメリカのラジカルは、自国での諸問題を処理しない外国の運動をつくり出すことによって、アメリカ帝国主義の仕事をしばしば行い易くしてきた、ということである。「運動」（それがたとえいかなるものであろうとも）は孤立し、アメリカ人は彼等の諸問題を処理するあらゆる傾向—それがリベラルであるのは勿論、反動的であれ—にとっては、正当な獲得者になる。

我々は幾つかの基本的なことで始めるべきである、と私は思う。第三世界は「社会主義革命」に従事しているのではない。人は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ等における闘争の真の性質を見落すためには、マルクス主義—第三世界物神崇拝者のお気に入りのイデオロギー——に恐ろしい程無知でなければならない。これらの諸大陸は、資本主義が合衆国とヨーロッパに対して一世紀以上も前に解決したところの任務—国家統一、国家の独立、産業発展等—になおも従事している。第三世界は、国家資本主義が合衆国やヨーロッパで支配的になりつつあり、その結果、社会的諸力が極度に静的性格を持つ時代に、これらの任務に従事しているのである。社会主義と発展した形態の国家資本主義は相互に区別することは容易ではない、特に人の「社会主義」概念が高度に図式的であるならば。位階制を赤旗で飾り隠し、原始蓄積と強制的集産化のもっとも狂暴なシステムを「人民」あるいは「プロレタリアート」等の利益についての美辞麗句の巧言の中に没せしめ、位階制、エリート主義、警察国家等をマルクス、エンゲルス、レーニン等の巨大な肖像で覆い隠し、もっとも権威主義的な追従を召来する小さな「赤表紙の本」を印刷し、そして、もっとも内容空疎な陳腐を「弁証法」とか「社会主義」とかの名のもとで説教せよ—そうすれば、自分のイデオロギーで迷いがさめかかっている、がなおも、家父長的家族や権威主義的な学校等から得てきたところのブルジョア的自己調節に総体的には無意識である何でもすぐ真に受けるいかなるリベラルも、突然熱烈な「革命的」社会主義者になり得る。

全プロセスは胸クソが悪くなる—プロセスが現実のあらゆる面と対立しているが故に、すべてがなお一層そうなのである。人は絶叫せずにいられない気になる—「見よ、自国が蹂躙者となっている！自国で資本主義と闘うことによって第三世界を援助せよ！お前の真の任務が自国の資本主義を打倒することである時、ホーや毛のスカ

ートの下に隠れることによって、アメリカ革命の真の可能性を処理することを捕り逃すな！ここアメリカでのあらゆる革命的プロジェクトは、たとえいかにその目標や言葉がアメリカの条件に限定されているとしても、必然的に国際主義的であり、反帝国主義的であるが故に、自国での革命的プロジェクトを発展させよ！」我々が第三世界の必要を満足させるためには、毎日十ないし十二時間労働しなければならないだろう、という根拠に基づいたオグレスビィの貧窮―後的アプローチへの敵意は、単純な馬鹿々々しいものである。労働時間がアメリカ革命によって増加されるだろう、と仮定することは、最初の一撃が発せられる前に、革命の敗北を召来することである。もし、何かすばらしい方法で、オグレスビィの「革命」が勝利を得るとしたら、彼はきっと、アメリカ人は全国民にその鞭を打ち鳴らす強力な、中央集権化した国家装置がなければ、増大した労働時間を受け入れないだろう、と考える。このような場合、人は、どんな種類の「援助」をこのような体制が第三世界に「捧げる」だろうか、といぶかる。

「第三世界」の熱狂者の多くのように、オグレスビィは、アメリカの工業的力能と第三世界の真の必要についての不完全な知識しか持っていないように思える。アメリカの労働力のほぼ七〇パーセントは、完全にいかなる生産的な労働もしていない、そして、それらの労働力は真の生産的な部門、あるいは分配の合理的なシステムの維持に移し変えられ得る。それらの労働は大部分、商品経済に奉仕することに限定されている―書類等のとじ込み整理、目録に記入して表を作成すること、損益計算書の簿記、販売促進、広告、小売、金融、株式市場、政府の業務、軍事、警察業務、等々、へどが出るほどだ。生産される商品のほぼ同パーセントは、合理的な社会においては、人々がそれを消費することを自発的に停止するような純粋のがらくた物である。労働時間は、有効な労働力の供給と原材料が合理的に用いられる、と仮定すれば、高い生産高を失うことなく革命後も極度に減少され得る。さらに、生産品の質は非常に改善されるので、その耐久性と有用性は、生産力におけるいかなる減少をも棒引きにしてあまりあるだろう。

他方、我々は第三世界の物質的必要についてもっとも仔細に調べてみよう。西洋人として、「我々」は、「彼等（第三世界の人々）」が、資本主義がアメリカやヨーロッパで造り出してきたのと同じ種類の工業技術や商品を欲している、あるいは必要としている、とすぐに仮定し勝である。この粗末な仮定は、黒人、褐色人、黄色人等の数えきれない程多くの人々が、「我々」の莫大な富と「我々」の生活水準を飢えた目で視ている、という帝国主義者によって意識的につくられた心配事によってささえられている。このイデオロギーは我々に、「我々」がアメリカ人やヨーロッパ人であり、「自由企業」の恵みを享楽することができ、いかに幸福であるか、を思い起させ、そして「彼等」は人口過剰のため貧困、悲惨、病気等に苦悩させられて、いかに脅やかされているか、を思い起させる。西洋的条件の下で、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ等の必要を「第三世界」の熱狂者達もまた考えている―工業技術巨大症のエンクルマ（元ガーナの首相）精神と呼ばれてもよいアプローチ―、という意味では、これら熱狂者達は、皮肉にも、このイデオロギーを伴に分ち持っている。第三世界の前資本主義社会において生き生きとし、力強いものは何んでも、産業の発展へ犠牲として捧げられ、新しく

改宗した男らしいラジカルの病的な自負心のエリート主義でじくじくとしてくる。

多分、第三世界以上に生態工業技術に適した地帯は、世界中のどこにもない。(注) アジア、アフリカ、ラテン・アメリカのほとんどは、北緯四〇度と南緯四〇度の間の「太陽ベルト」に位置する。そして、そこでは、太陽熱エネルギーが最高の効率を持って工業目的及び家庭内の目的に利用され得る。新しい、小規模工業技術が未開発地帯においては、他のいかなるところよりも一層容易に実用に適応される。事実、小規模耕作技術は、亜熱帯、熱帯、高地等の生活環境において主要である土壌型の生産利用のためには必要不可欠である。これらの地帯の農民は、小機械がすでに有効であったり、容易に設計できるところの段々畑耕作や園芸において、技術知識の長い伝統を持っている。年中豊富な水資源を農業と工業に提供するために、かんがい技術の長足の発展がなされてきた。機械とこの地帯ではなおも他をしのいでいる手工業との独特の組合せが達成され得る。生活水準と教育水準の上昇とともに、これらの地帯の人口は、土地への圧迫を除去するのに十分な程に安定すると予期され得る。何にも増して、第三世界が必要とするところのものは、豊富な供給地域から需要地域へ食料や工場製品を再分配するための合理的な、巧妙に計画された共同体のネットワークである。

（注）第三世界のための「西洋」型工業技術に代るもの、及びこの地帯での「人口問題」の解決は、私の近刊書『人口神話』において幾分詳細に論じられるだろう。

この種の工業技術は、西洋の富源に過度の負担をかけることなしに、アメリカやヨーロッパの産業によってかなり急速に第三世界のために発展させられ得る。このような工業技術の合理的な利用は、第三世界における大々的な社会革命を前提とする―合衆国における社会革命にほとんど直接引き続いて起るだろう、と私の信じる革命を前提とする。帝国主義の鎖かたびらを着せられたげんこつ（＝帝国主義の侵略武力）の除去と伴に、新しい展望が第三世界のために開け得る。村落は、地方に非常に強く寄生している中央政府によって任じられた地方位階制の消滅と伴に、新しい意味の単位制を獲得するだろう。交換経済は、その基礎が多分集産主義的になるだろうけれども、第三世界に存在し続けるだろう。ともかく、労働者の搾取と男による婦人の支配は消滅させられるだろう、かくして、搾取目的のための収入差額の利用に厳しい制限が課せられるだろう。(注) 第一世界の富源は、もっとも革命的な社会的代替物―権威主義的運動に反対するものとしての人々の運動、中央集権化され、媒介調停された制度に反対するものとしての非中央集権的、直接無媒介的関係等々―を促進するために利用され得る。

（注）スペインのアナキズム運動が農村経済に加えた衝撃から一層多くのことが、毛やホウ及び彼等が代弁する運動からよりも、学ばれ得る、と私は思う。不幸にも、この運動の展開についての非常に僅かな情報事実しか英語では入手できない。フランコの反乱の初期の数週間、スペインのプエブロ（村落共同体）による土地の収用と集産化は、農民がリバータリタンな感化力にいかに応答するか、についてのもっとも顕著な説明の一つを我々に提供する。

第一世界における完全な社会革命に引き続いて起る第三世界における革命的変化から、いかなる種類の制度的構造が生じるか、を述べることは困難だろう。今日まで、第三世界は大部分独力で帝国主義と闘うことを余儀なくさせられてしまってきた。第三世界の闘争に対してヨーロッパや合衆国における数限りない多くの人々からの非常に大きな国際的連帯があったけれども、これらの枢軸的な工業地帯からのいかなる真の、私心のない物質的支援もなかった。革命合衆国や革命ヨーロッパが第三世界を十分に、私心なく、つまり問題のアフリカ人、アジア人、ラテン・アメリカ人等の幸福以外の何も考えずに、援助し始めた時、何が起るだろうか、と誰でも思う。第三世界における社会発展は、我々が予期する以上に温和な、リバータリアンな形態を取るだろう、と私は信ずる。そして、これらの地帯における物質的貧窮を処理するのに驚ろく程僅かの圧制しか必要とされないだろう、と私は信ずる。

ともかく、第三世界における擬似国家主義的発展が、一時的なもの以上になりはしないだろうか、あるいは、それが世界の発展に影響を及ぼしはしないだろうか、と恐れるいかなる理由もない。もし合衆国とヨーロッパがリバータリアンな方向を取ったならば、世界経済におけるこれら諸国の戦略的工業地位は、全体としての世界のリバータリアンな代替物に有利に作用するだろう、と私は思う。革命は、たとえそれが相当小さな、経済的には微々たる国で起った時でも、伝染性がある。東欧が西欧や合衆国におけるリバータリアンな革命の影響を受けないでいることができる、と私は想えない。革命は、多量の不満足が存在するソ連をほとんど確実に巻き込み、遂に全アジア大陸に波及するだろう。もし誰かこの可能性の実現を疑う者がいるならば、世界経済が今日よりもずっと僅かしか相互依存的でなかった時代のヨーロッパへのフランス革命の衝撃を考えて見よ。

革命の後、地球は全体として処理されるだろう。高密度地域における人口の再配置、生活の質の改善に向けて位置づけられる合理的な、ヒューマニスチックな産児制限プログラムの発展、生態学的線にそっての工業技術の修正等—これらのプログラムのすべては歴史の議事日程にのぼせられるだろう。生態学から引き出された幾らかの基本的なガイドラインを示唆することを除けば、私は、世界の資源と土地が革命後の時代に生活を改善するためにいかにして用いられ得るか、についてただ推測することができるだけである。これらのプログラムは、実際に、そして、今日存在するいかなる共同体よりも、文化的、心理的、物質的にずっと高いレベルに立っている人間共同体によって、解決されるだろう。

《『マルクス主義者よ、聞け！』は低級なマルクス主義者—進歩労働党、トロッキスト、他の「旧左翼」の運動家等—の批判としては全く適当であるように思える。がしかし、もっと気のきいたマルクス主義者—マルクーゼやゴルツやグラムシの称賛者のような人々—についてはどうか。確かに『マルクス主義者よ、聞け！』は、マルクス主義の批判のための出立点として「旧左翼」を取り上げることによって、あまりにも多くを「旧左翼」に負わせている。》

マルクーゼは、今なおマルクス主義者と自称する思想家の中でも

つともオリジナルである。そして、私は、私が彼に不賛成である諸点に関してでさえも、彼が言わねばならないところのことによって私が刺激を受ける、ということを自認しなければならない。このことを除けば、私は、『マルクス主義者よ、聞け！』が「旧左翼」の批判としてのみ適当である、という主張には賛同しない。私の論文はあらゆるタイプのマルクス主義イデオロギーに適応する。マルクスの円熟した諸著作について二つの事が私を困惑させる—それらの擬似客観性とそれらがユートピア的思考に対して設ける障害物。マルクス主義プロジェクトは、それがマルクス自身によって公式化された時、初期社会主義的伝統を深めもしたが、またその伝統を狭めもした、そして結局、このプロジェクトは正味の進歩ではなく、むしろ正味の妨げをつくり出した。

マルクスの擬似客観性によって、私は、マルクスが「科学的社会主義」と十九世紀の科学主義を同一視したまでの驚ろくべき程度を意味している。今日、より気のきいた「新マルクス主義者」がマルクス主義プロジェクトに疎外の点から光を当てようとする傾向があるけれども、そのプロジェクト（マルクス自身の手で発展した）は何にも増して、社会主義を「科学的」にし、社会主義に科学的批判の権威を与えようとする試みであった。自由とエロス（いやしくも後者が取り上げられるところがあるなら）は、あまりにも完全に自由のための物質的前提条件に錘を降ろしているので、自由の喪失でさえも、もしそれが物質的発展を促進したならば、自由の「進展」と看なされた。例えば、マルクスは生産力の発展における一段階として国家的中央集権化を歓迎した、そして、彼は、このプロセスが革命に抵抗するブルジョアジーの力能をいかに強めるか、を一度として考えなかった。彼は社会のいかなる道徳的な評価をも拒絶した、そして、後年には、科学主義と事実の数学的批判規準に増々捕われるようになった。

この発展の結果は、社会主義のヒューマニスチックな、想像的な諸要素の重大な喪失であった。マルクス主義は、法律的精神性とほとんど区別できない擬似客観性に左翼の錘を降させることによって、恐ろしい程左翼に打撃を与えてきた。私が聞くときはいつでも、「新左翼マルクス主義者」は他の立場を「客観的に反革命的」、「客観的に人種主義」、「客観的にセックシズム」等々—背筋がむずむずしてくる—だと批判する。あらゆる反対者にでたらめに投げつけられる批難は、分析的な、あるいは弁証法的な批判の必要を押える。人は単に、「反革命」、「人種主義」、あるいは「セックシズム」等を先入見的「客観的結果」の原因に帰せばよいことになる。マルクスはめったに「旧左翼」や「新左翼」の生硬さをこのアプローチを取るときに示しはしなかった、がしかし、彼はしばしばそのアプローチを用いることで十分であるとしたり、現象の多元的分析の代用としてしばしばそのアプローチを用いた。

これがいかに重大な結果をもたらすか、を知らねばならない。自由はその自律性、人間の条件を支配するその主権を奪われる。自由は目的ではなく、手段の中に押し込められる。自由が望ましいかどうかは、自由が「客観的」な発展を進めるかどうか、に依存している。従って、いかなる権威主義的組織、抑圧のシステム、操縦策略等も、もしそれらが「社会主義の建設」、あるいは「帝国主義への抵抗」に有利であるならば、受け入れられるもの、真に称賛し得るものになることができる—あたかも「社会主義」あるいは「反帝国

主義」は、それが操縦、抑圧、権威主義的形態の組織等によって毒されるときに、意味深いかのようである。カテゴリーが現実に置き換る—抽象的な目標が現実の目標に置き換る—「歴史」が日常生活に置き換る。把握するためには複雑な、多面的な分析を必要とする普遍は、特殊によって置換される—全体性が一面性によって置換される。

ユートピア思想の拒絶も同様重大なことである。マルチン・ブーバーが「社会主義のユートピア的要素」と呼ぶところのものは、「現実」の「事務的」な、「客観的」な処理のために拒絶される。しかし、事実、このアプローチは人の社会的経験と社会的観察知識の範囲を制限することによって現実を萎縮させる。所与の現実の潜在力は「客観的」現実性の強調によって消滅させられるか、少なくとも、一面的な処理によって減少させられるかのどちらかである。革命家は、あらゆる現実性と可能性の中で弁証法的に存在するのではなく、「科学的社会主義」による進歩の中に限定される経験に捕われるようになる。驚ろくには値しないことだが、旧左翼と同様に新左翼も、生態的問題の革命的潜在力を決して把握してこなかったし、かつまた、生態学を共産主義の再建とユートピアの諸問題を理解するための基礎として利用してこなかった。もっとも良くて、問題は、いかに「汚染が利益を上げている」か、についての幾らかのたわ言と伴に、口先だけの解決姿勢を与えられるだけである。最悪のとき、問題は似非的、けん制的、そして「客観的に反革命的」だと非難される。気のきいたマルクス主義者のほとんどは彼等の新左翼の仲間と同様に、マルクス主義のこれらの制限的特徴に捕らわれている。相異は、彼等が単により気がきいている、ということである。

《ほとんどのラジカルな著作と比較して、『マルクス主義者よ、聞け!』は、「階級社会」の代りに「位階制社会」、「搾取」の代りに「支配」等について常に語っている。言語におけるこれらの相異はどんな意味を持つか。》

相異は明確に意図されている。マルクス主義以前の社会主義は、多くの点で、マルクス主義的変種よりもずっと広いものであった。それは単によりユートピア的であったのみならず、それは特殊によりも、より多く普遍に専心していもした。同志ジャック・ルーの死後も、ロベスピエールの左翼の粛清後も生き長らえた、偉大な過激派の最後の人であるヴァルレーは、統治と革命は完全に「両立し得ない」、と結論した。何とすばらしい洞察だ!この中に、誰でも、一特殊階級社会の批判から位階制社会の批判へかくのごとく拡大した革命的意識を観る。マルクス主義以前の社会主義理論及びラジカルな理論は、搾取のみならず、支配を専ら取り扱い始めていた。階級支配のみならず、位階制を専ら取り扱い始めていた。フーリエでは、意識は、社会の目標が幸福としてのみならず、快楽としてさえ考えられる点にまで発展した。

これは何と途方も無い進歩であるかを理解しなければならない。搾取、階級支配、幸福等は支配、位階制、快楽等の一層普遍化された概念内部の特殊概念である。搾取と階級支配を消滅すること、あるいは幸福を達成すること等は、これらの概念がマルクス主義によって限定され、快楽の生活の達成、あるいは支配や位階制の消滅等がなされない時には、理論的に—そして、大部分は現実的に—可能

である。マルクスは、搾取、階級、そして幸福等を経済的領域に「科学的」に固定することによって、元来の社会主義的価値からの理論的退行のための論理的根拠を与えた。国有化のようなマルクス主義の経済的解決法は、位階制が消失した、という幻想を生みさえする。マルクス主義理論がいかに人を惑わせるものであるかを理解するには、ロシア国家の性格についてのトロッキー主義運動の苦渋を調べさえすればよい。

普遍のこの特殊化は厳密にマルクス主義がなしとげたものである。私が前の質問への答えで注意したように、社会主義は弁証法哲学の獲得によって大きな理論的深みを与えられた、がしかし、それはマルクスの経済の強調によって、恐ろしく狭くされた。マルクスの諸著作でさえも、人間が「円熟する」にしたがって、内容において縮小している。彼の諸著作は社会の「客観的」経済的要素に益々集中し、遂にマルクスは、我々が『資本論』第二部でみる種類の経済理論のグロテスクな物神崇拝に落ち込む。マルクスの死と伴に、莫大な評釈文献が資本主義的流通、蓄積、そして「現実化理論」について現われた。ローザ・ルクセンブルクでさえも、この泥沼にはまり込んだ。『アメリカ経済評論』や『科学と社会』等に論文を書きなぐるケインズ主義マルクス主義者については言わずもがなである。

マルクス主義は、現実と接触を持つには掃き捨てなければならない途方も無い知的調度品をつくり上げた。その分野は、彼等のがらくたがオリジナルな、本当に弁証法的な思想を事実上不可能にしてしまう「エキスパート」や重鎮、学者や権威で充満している。一度基本的本質的なものが救い出されれば、この理論的がらくた物は捨て去られるべきである。我々は、マルクス主義以前の社会主義が確立した普遍化された地点に戻り、そして、それから再前進する、ということがこの上なく必要である。

青年文化は、そのもっとも豊かな、もっとも意味深い表現—「死に対して生活」—で「社会問題」をすでに提起してきた。マルクス主義への洞察眼をもって、私は「生存に対して生活」と言いたい。ともかく、我々は、我々の展望を制限的態度で決定するマルクス主義の一面的な、抑圧的なわけのわからない専門的寝言たわ言から出なければならない。私は、その中でクロンシュタットの革命的水兵の言葉がボルシェヴィキの言葉と対照的であるポール・アヴリックの最新の本、『クロンシュタット一九二一年』からのすばらしい一節を思い出す。水兵達について語る際に、アヴリックは述べている。

「反乱者のアジテーター達は、〈会見者が後に述べたように〉マルクス主義の専門語や外国語的響きの表現等にとらわれずに、平凡な言葉で書き、話した。〈プロレタリアート〉という語を避けて、彼等は、あらゆる〈こつこつ働く人達〉—農民、労働者、〈こつこつ働くインテリゲンチャ〉等—が支配的な役割を演じるだろうところの社会を、真に大衆主義的なやり方で、要求した。彼等は〈社会主義〉革命よりもむしろ〈社会〉革命について語り勝であったし、また、階級斗争を産業労働者対ブルジョアジーという狭い意味ではなく、労働大衆の悲惨と搾取で繁栄するすべての者達—地主や資本家は勿論、政治家や官僚もそれに含まれる—に対抗する全体としての労働大衆という伝統的ナロードニキ的意味で考えていた。西洋イデオロギー—マルクス主義及びリベラリズム—は彼等の精神的見地には少しの位置しか占めていなかった。」

勿論、要点はロシアイデオロギー対西洋イデオロギー、あるいは

「外国的響き」の言葉対「素朴な」言葉ではない。真の要点は、「大衆」がほとんど直観的に働かそうとしたより広い概念—彼等自身の抑圧の経験から引き出された概念—である。水兵達は「労働大衆」や「抑圧者」等についてボルシェヴィキよりもいかにより広く考え、抑圧者の中にエリート主義ボルシェヴィキを含む、という考えを持っていたかを注目せよ。私としては、アメリカの新左翼が「労働者やプロレタリアート」という語を「人民」で置き換えてきた、ということを喜ばしく思う。実際、公然たるマルクス主義グループであるブラック・パンサーやウェザーマンでさえも、大衆的言葉を用いることを余儀なくさせられてきた、ということは意義深いことである、なぜなら、この大衆的言葉は我々の時代の変化した現実と問題を反映しているのであるから。

要約—私が語っていることは、「力」という語によって反映される人間的条件である。我々は歴史的な、日常的な二分法—女を支配する男の力、人間を支配する人間の力、自然を支配する人間の力—を最終的に解決しなければならない。なぜなら、力—支配—の表出に関しては、力の矛盾的な、破滅的な結果—生活を与える性、生活を育てる社会、生活に位置づけられるエゴ、生活を維持する生態等の腐敗—が固有のものだからである。「権力の腐敗」という言葉は、それがけっして十分には理解されてこなかったが故に、自明の理ではない。権力が今や破壊しつつあるが故に、それはその内に理解されるようになるかも知れない。いかなる量の理論的評釈も権力を歴史や革命組織の御用とすることはできない。もはや許されてもよい力の唯一の行使は、個々人の日常生活を支配する力を個々人に与えることによって、かような権力を最終的に分解消滅させるだろうところのあの一行動—大衆革命—である。

ニューヨーク
一九七〇年八月